

『パルメニデス』篇における「似」の形相

高木 酉子

序

範型としての一般的なアイデアと、そして「有」「同」「異」「似」「一」「多」といった形相的概念との区別は、プラトン後期の哲学を特徴づける一つの重要な革新とすることができよう⁽¹⁾。プラトンは『パルメニデス』篇において、アイデアの分有に関わる二つの無限遡行をパルメニデスに指摘させているが、このうち二番目のものは、アイデアの範型モデルの帰結としての無限遡行である(132c12-133a7)。この箇所での無限遡行の指摘を、Schofield⁽²⁾は——アイデアの一般的な無限遡行ではなく——「似」のアイデアの無限遡行を指摘するものと解釈し、これによって、範型モデルによるアイデアの分有理論自体はパルメニデスによる論難を免れているとする。

パルメニデスによる一連のアイデア論批判は、「同じものが似ていて、かつ似ていない」ことを否定するゼノンに対して、「似」を分有するものと「似」の形相との区別に基づいてソクラテスが異義を唱えたことを発端としている(127d6-130a2)。パルメニデスによるアイデア論批判に、「似」のアイデアの放棄を読む Schofield の解釈は、パルメニデスによる批判を産婆術的に捉えるという積極的な意図を背景としながらも、ソクラテスによる「似」の形相の導入そのものを宙に浮かせてしまう。

アイデアの分有に関わる二番目の無限遡行の指摘は、テキストを検討する限り、確かに、「似」の形相の無限遡行を示唆するものと解釈する余地がある。しかし、当対話篇中における二番目の無限遡行の指摘は、「似る」という語で表現されうる二義——他方と同じ形相を共有することと、他方の形相を帯びることと——を逆手に取った、巧みな議論構成に基づくものとも読める。

そして、「似る」という語のこのような両義性に伴って、この二番目の

無限遡行の指摘は、同時にやはり範型モデルによる形相の無限遡行の指摘ともなる。実際、対話相手である若きソクラテスは、あらたに提出した範型モデルに対する論駁として、パルメニデスによる無限遡行の指摘にあっさりと言得された、と読むのが自然であろう。これに対して、「似」の形相の無限遡行の示唆は、ソクラテスのゼノン批判に対する論駁としては、むしろソクラテスの頭越しに読者に示されることによって、その機知を発揮するだろう。ただし、「似」の形相が示唆される局面において、無限遡行を導く議論のポイントが「似」の形相の却下にあると即断してはならないであろう。

いずれにせよ、当対話篇において、パルメニデスによる二番目の無限遡行の議論が語の両義性に基づく fallacy であるとすれば、「似」のアイデアも、範型モデルも、——アイデア探究においてこれらの想定にいかに関題を見出すことができようとも——少なくとも、一番目の無限遡行——後にアリストテレスにより「第三の人間」として再構成される無限遡行⁽³⁾——からは、ともに免れているということになる。

I パルメニデスと形相分取⁽⁴⁾批判のアイロニー

プラトンが『パルメニデス』篇において、存在を「一」であるとするパルメニデス説擁護としてゼノンに提出させるのは、「存在が多ならば、それは似ていて似ていないということになる。だがこれは、不可能である」という議論である (127d6-128e4)。これに対してソクラテスは、「似る」や「似ない」ということが、何らかの形相として ——*eidos ti homoiotêtos, ho estin anomoion* (129a1-2) . *auta ta homoia, anomoia* (129b1-2) . *homoiotêta, anomoiotêta* (129d8) —— それ自体で存在するのではないか、そしてこれら「似る」「似ない」を分取・分有するものが両方を許容することがあっても、すなわち、似ていて似ていない (*homoia te kai anomoia*) ということがあっても当然ではないか、と反論する (128e5-130a2)。

この、ソクラテスが導入する形相概念と、そしてその分取の仕方について、吟味を加え、順にアポリアを提示していくのは、今度はパルメニデスである。分取される形相に関してソクラテスが棄却できない一点、

それは形相が「一つのもの (hen) である」という点である。これに対して、ソクラテスの形相分取の説を吟味する中で、形相が必然的に多となることを導くことにより、ソクラテスの形相説を順に覆してゆくこと、この役割を担わされるのが、他でもなく、存在を「一」であると考えられるパルメニデスその人ということとなる。

まず、はじめに、形相については、その種類 —— 「似」「一」「多」など⁶⁾、「正」「美」「善」など、「人間」「火」「水」など、そして「毛髪」「泥」「汚物」など—— が問われる (130b1-130e4)。

そこで、いったい分取されるのは、そうした形相の全体なのか部分なのか。一つの形相が一つの同じもののままで、自分が自分から別になることなく多数の事物に内在できる仕方として、ソクラテスは「昼 (あるいは、日)」の比喻を提案するが、パルメニデスは「帆布」の比喻で返し、各事物に内在するのは全体の部分であるほかないと一蹴する。そして、そのように部分に分けられる (merizesthai) ものが、一つと言われる形相であるはずがない (130e4-131c11)、と言う。現に、形相に部分を許すならば、分取において、「大」、「小」、「等」といった形相の場合、それが分取されることによって事物が大や等とされるべき「大」や「等」の部分は、もとの形相「大」や「等」より小となり、逆に、もとの形相「小」は、分取される部分である「小」より大となってしまう (131c9-131e2)。

このようにパルメニデスは、一つのものとしての形相の分取のアポリアを、まず形相の全体のままでの分取の困難 —— 一つのものであるはずの形相が、多くものものになってしまう —— を示すことにおいて導く。一つのものとしての形相の分取のこうしたアポリアが、このように、形相がいわば分割によって多になってしまうことの指摘に基づくとするれば、パルメニデスが次に導くアポリアは、形相が無限に増え、多くなってしまうということの指摘に基づく。

すなわち、パルメニデスは、同じ容相が多数の事物に認められることから、こうした容相を一つの形相と考えるに至るのではないかと問うた上で、しかしながら、そのように現われた形相、たとえば「大」と、そして多数の事物におけるその同じ容相との、それらがすべて同じ容相と見られる所以となるようなあらたな形相「大」が別に現われるのではないかと、言う (132a1-132b2)。形相は、一つではなく、今や無限に多となろう。アリストテレスが「第三の人間」として言及することになる

アイデアの無限遡行の、おそらくは起源でもある⁶⁾、「大」のアイデアの無限遡行である。

さて、パルメニデスが導いて見せた形相分取のアポリアから逃れ、形相の単一性を救うべく、ここでソクラテスは、そうしたあらたな形相のそれぞれは、観念 (noêma) として、他でもなく心のうちに現われるものとするべきではないかと提案する。これに対してパルメニデスは、しかしそれら一つ一つの観念は、一つ一つ何かあるものの観念であるはずであること、そしてそれらの観念において、多くのものにおいて一つと同じものであるとして思惟されるもの、それがすなわち形相ということになるのではないかと、さもなければ、そうした観念を分有する事物は、観念からなるものとしてそれ自体が思惟するものであるか、そうでなければ観念でありながら思惟不能⁷⁾ということになるか、いずれかであるだろうと言う (132b3-132c11)。

そこで、ソクラテスは、形相の単一性を救うさらに別の方法を提示する。それは、分取されるものの比類なさを確保する格別の方法、すなわち、形相を範型とする考え方である。

II 「似」の形相と範型アイデアのアイロニー

「これらの形相は、ちょうど範型のようなものとして、自然のうちに不動のあり方をしているのであって、それ以外のものはこれに似る (eoikenai) のであり、似せられたもの (homoiômata) としてあるのだということです。そしてこの限りにおいて、形相に対する他の事物の分有関係というのは、他の事物が形相に似せられる (eikasthênai) ということにほかならないということになるのです」 (132d1-4)

この範型の理想が具えるはずの形相の比類なさの想定は、しかし、やっかいな弱みを抱えている。まずは、パルメニデスによる反論を見てみよう。

[1] 「もし何か形相に似ているとしたら、その形相の方が似せられたものに似ていないということがありうるだろうか、それが似せ

られている限りにおいて。似ているものが似ているものに似ていないなどということがあるだろうか。」(132d5-7)

[2]「似ているものが似ている他方のものと同じ一つの形相を分有する (henos tou autou eidous metechain) ということは大いなる必然ではないか。」(132d9-e1)

[3]「そしてそれら類似するものが、それを分有することによって類似していることになる当のものとは、かの形相そのもの (auto to eidos) であるということになるのではないか。」(132e3-4)

[4]「従って、何か形相に似るということも、形相が他の何かに似るということも不可能ということになる。そうでないと、形相のほかにもいつもまた別の形相が立ち現われることになるだろう。そしてまたその形相が何かに類似するとすれば、またもや別の形相がということになる。そして形相が自分を分有するものに類似することになりさえすれば、いつも新しく形相が生ずることになって、いつまでもやむことがないであろう。」(132e6-133a3)

[5]「したがって、類似するという仕方で (homoiotêti) 他のもものが形相を分取する (metalambanei) のではなくて、もっと別の分取の仕方を何か探さなければならないということになる。」(133a5-6)

一見して、ここでは「大のアイデア」の無限遡行と同型の、形相一般の無限遡行が指し示されているかのようなのである⁽⁸⁾。つまり、範型としての F の形相とそれに似るものは、互いに似ている ([1])。互いに似ているものは、同じ一つの形相の分有によって似ている ([2])。すなわち、F の形相そのもの —— 形相 F 自身(「かの形相そのもの (auto to eidos)」) —— の分有によって、互いに似ている ([3])。かくして、形相が何かに類似するたびに、あらたにその形相を立てることになる ([4])。

しかしながら、実はここで「かの形相そのもの (auto to eidos)」というのは、問題をはらむ表現である。というのも、もしこれを、実際 F の形相自身を意味するものとすれば、それはつまり自分自身を分取することとなり、[4]の無限遡行の指摘がそれゆえにこそ可能となるはずの形相の原理 —— ある性質を持つものは、その性質をそれに負う形相自身とは異なる⁽⁹⁾ —— と矛盾することになるからである。

おそらく、ここで振り返るべきは、類似するものについて、ゼノンのパラドクスに対してソクラテスが当初から、またソクラテスに対してパルメニデスが、いずれも問答の要において、「似るという形相を分取することによって似るものとなる」(129a4)、「その形相を分取することによって、その形相が持っている呼称をもつようになる、例えば似を分取することによって似たものとなる・・というのかね」(130e5-131a2)というやりとりを経ているということであろう。今パルメニデスは、この、「似」の形相導入のソクラテスの表現を反復・再現しているのではないか⁽¹⁰⁾。とすれば、「類似するものが、それを分有することによって類似していることになる当のもの」としての「かの形相そのもの (auto to eidos)」とは、「似」の形相のことを言っているのではないか。そうすると[4]は、何か似の形相に似るということも、似の形相が他の何かに似るということも不可能である、そうでないと似の形相のほかにもいつもまた別の似の形相が立ち現われることになる、かくして、似の形相が自分を分有するものに類似することになれば、いつも新しく似の形相が生ずることになってやむことがない、と言っていることになる。

そうすると、パルメニデスによる無限遡行の指摘は、「似」の形相の無限遡行の指摘にすぎない、ということになるのではないか。つまり、もし「一つのもの」である形相——つまりはソクラテスにとってのアイデアであるが——、そうした形相一般の無限遡行を、ソクラテスの提出する範型モデル自体は免れているとすれば、ここでのパルメニデスの反論は、「似」の形相の放棄を促す役目を担うにすぎないということになろう。パルメニデスは、順にアポリアを示していくことにより、ソクラテスから、あたかも産婆術的に⁽¹¹⁾、より洗練された形相の分取の考え方を——「日(昼)」の比喩、観念としての形相、そして形相の範型モデルというように——引き出していったと考えることができる。かくして、パルメニデスの産婆術が、ソクラテスの提出した素朴な範型モデルの提出に対して、——範型モデル自体のなしくずし的批判というよりも——その形相・分取モデルとしての効力の、さらなる洗練を促すはずであるなら、今、その促す役目を果たすのが、「似」の形相の無限遡行の指摘ということとなろう⁽¹²⁾。存在を「一」とするパルメニデスその人が、若きソクラテスのアイデア論に対して、多が帰結する論駁を次々と提出するのも、アイデアがあたかも、いまだ「一」であることができないということの指摘

であるかのようにである。

しかし、ここでいったん立ち止まってみよう。確かに、存在の「多」を否定するゼノンの後見パルメニデスの仕事は、「似ていて似ていない」もののパラドクスに反論するソクラテスに應對して、「似」の形相の理論を論駁して見せることであるかもしれない。しかし、ソクラテスに対しては、それ以前に、「似」の形相の ——したがってまた、形相の分取の —— 理論の吟味に乗り出したわけであるし、パルメニデスの論駁をソクラテスも一つ一つ受け止めてきたのである。それは、この第二の無限遡行の指摘に関しても変わらない。引用[5]で見たように、パルメニデスは「類似するという仕方で他のものが形相を分取するのではなくて、もっと別の分取の仕方を何か探さなければならない」と論駁をまとめ、それに対して、ソクラテスは「そうらしいですね」と答え、パルメニデスは「よくわかるだろう、形相をそれ自体がそれ自体で独立に存在するとしてだれかが規定するなら、どれほどの難問がそこに生ずるかということが」(133a8-9)と言う。

というわけで、再び[3]の「かの形相そのもの (auto to eidos)」に戻ってみることにする。「かの形相そのもの (auto to eidos)」は、これを、Fの形相自身を意味するものとすれば、形相が自分自身を分取することを許すということとなってしまう、[4]の無限遡行の成立根拠をなくすのではないかということ、先に見た。ただ、[4]の無限遡行を導くための前提として、[1]については、まだ検討していない。範型としての形相とそれに似るものは、互いに似ている、としたパルメニデスの[1]の前提である。もし、この前提自体に問題があるとすれば、ソクラテス自身は[1]の問題を見逃したとしても、また、[3]と[4]の間の矛盾の発生以前に、本来、無限遡行は成立しないのではないか。

実際、この前提が問題をはらむと考えられるのは、形相に、それを分有するものが似る、と言われるとき、「似る」という語が両義性を許すからである。というのも、AとBとの間の関係性について「似る」という語を用いる場合、AとBとが互いに何かの形相を共有して類似するという視点以外に、AがBの形相にあずかることによってBに似るという視点がある。息子が父親に似てくると言うとき、それは確かに息子と父親が互いに似てくると言うことを含意はする。しかし、我々はけっして、

息子と父親がある共通の形相に似てくるということを考えてこう言うわけではない。むしろ、息子が、風貌にせよ性格にせよ、彼の父親の形相を帯びてくる、彼の父親のようになってくる、ということ言うのではないか。ギリシア語においても、この事情は変わらない。

そうすると、前提[1]の虚偽とは、正確には、パルメニデスの発言、

[1]「もし何かがある形相に (a)似て いるとしたら、その形相の方が似せられたものに (b)似て いないということがありうるだろうか、それが似せられている限りにおいて。似ているものが似ているものに似ていないなどということがあるだろうか。」(132d5-7)

中、この前半の部分に見出されることになろう。パルメニデスは、形相の無限遡行を導く議論を進めるにあたって、ここで、「(a)似て」も「(b)似て」も、いずれも、ものどものとが互いにある形相を共有し合って類似する、と考える視点で言う。けれども、何かは範型に似るという想定のもとで、本来「(a)似て」の方は、むしろ、ものが他のものの形相を帯びる、と考える視点を表し得たはずである。パルメニデスに問いかけられているソクラテスは、範型という考え方を自ら提出しておきながら、「似る」と言うことで表現しうる形相分取の想定の不確かさから、「(a)似て」の方を、形相を帯びるという視点に基づいてあえて「(b)似て」と区別して理解しようとはまではしていない。パルメニデスの議論は、ソクラテスの抱くイデア論の未熟さを、的確に突いているということになろう。そして、前提[1]の虚偽とは、ようするに、形相を分取するものが形相に「似る」、というその特有の意味において、形相自身がそれを分取するものに「似る」ということはない、というイデア論の暗黙の想定からの、まさに離反そのものに基づくということとなろう。

前提[1]とは、範型の想定に基づく形相分取の理論に対して、無限遡行の形で——一であるはずのものが多になってしまうという——その矛盾を導くという、そうした目的を持つ議論のための前提である。しかるに、この前提[1]の虚偽は、パルメニデスによる無限遡行の指摘を、範型モデルの形相一般に対するものとみなす場合にも、あるいはまた、「似」の形相に対するものとみなす場合にも、どちらの場合にでも、無限遡行

の議論の成立根拠を崩す。だが、無限遡行の指摘が、実際にいかにして
範型モデルの形相一般に対するものとなるのか、また同時に、「似」の形
相に対するものとなると考えられるか、この点をさらに明らかにしなけ
ればならない。

[1]に続くパルメニデスの発言[2]から[3]への移行を見てみよう。

[2]「似ているものが似ている他方のものと同じ一つの形相を分有す
る (henos tou autou eidous metechain) ということは大いなる
必然ではないか。」(132d9-e1)

[3]「そしてそれら類似するものが、それを分有することによって類
似していることになる当のものとは、かの形相そのもの (auto to
eidous) であるということになるのではないか。」(132e3-4)

ここで、[2]を、「互いに似ているものは同じ一つの形相の分有によって
似ている」と言うものと理解し、[3]を、「すなわち形相そのものの分有
によって互いに似ている」と言うものと理解する限りで、[2]と[3]は、同
じことを二度言っているようでもある。果たして、圧縮された議論の中
で、パルメニデスが同じ内容のことを繰り返して言っていると読み流す
べきだろうか。

実は、H.Jackson⁽¹³⁾が提案して以来、Oxford Classical Text や Budé
版では、下線部における「形相 (eidous)」の削除がほどこされている。
この提案は、eidous を読む場合に引用[2]が、続く[3]と内容的に重なり、
[3]を不要としてしまうという理由からなされたものにほかならない。
eidous の削除は、[2]を「似ているものが似ている他方のものと同じ一
つの性質を分有する」と解することを可能にする。これにより[2]は、続
く[3]でこうした分有、もしくは共有された性質が「形相 (イデア) であ
る」ということが述べられるための、議論のつなぎとなるわけである。
eidous の削除は、しかし写本上の裏づけを欠き、古代より Proclus もこ
れを読んでいる⁽¹⁴⁾。

問題を考える上で、[2]における下線部全体に注意してみると、ここで
はさらに、「同じ一つの形相を分有する (henos tou autou eidous
metechain)」として、「分有する (metechain)」という語が用いられて
いる。eidous の削除によって、下線部を「同じ一つの性質を分有する」

と解するとしても、依然、この「分有する (metechein)」という語によって、すでに[2]で、直接にイデアとしての形相に言及しているということにはならないのだろうか。果たして、「分有する (metechein)」という語が、metaphysically unloaded な語としてこの文脈で用いられうるだろうか⁽¹⁵⁾。

おそらく、[2]がイデア論批判の議論を組み立てるパルメニデスの言であるということが、ここでも、もっとも注意されてよいことだろう。興味深いことに、パルメニデスは、無限遡行を導いた直後の、

[5]「したがって、類似するという仕方(homoiotêti) 他のものが形相を分取する (metalambanei) のではなくて、もっと別の分取の仕方を何か探さなければならないということになる。」(133a 5-6)

では、つまりソクラテス自身の範型イデアの想定を見送った時点で、「似ること以外の仕方で」あらためて「分取」というものを考えなければならないと言うときには、metalambanei と言い方を変えている。議論中パルメニデスは、いったい分有という語を、どのように用いていたのだろうか。パルメニデスは、[1]で虚偽の前提に対して同意を取り付けるために、何かの形相(性質)の共有と、範型としての形相(イデア)の分有とを、「似る」という語の両義性に基づいて混同させた。それと同じように、やはりソクラテスの主張に対する論駁の文脈にある[2]では、「形相を分有する (eidous metechein)」という表現をソクラテスから借りながら、パルメニデスは実際には、互いに似ているものが同じ一つの「性質を共有する」という前提に同意を取り付けることが可能であっただろう。そうして、続く[3]で、その性質が「かの形相そのもの (auto to eidos)」であると論じることができるわけである。

それでは、結局、先に問題として取り上げたままであった[3]の「かの形相そのもの (auto to eidos)」は、どう読むべきか。先にも見たように、「形相 F 自身」を意味するとすれば、[3]では、形相が自分自身を分取するということが言われていることになってしまい、形相が増えていく——形相をあらたに立てていく——という[4]の無限遡行の成立を実際には不可能にする。実際には、というのは、もともとこの無限遡行へと導

く議論は、[1]の前提に虚偽を持つゆえに、いずれにしても成立不可能な議論であるからである。

しかし、まさにこの局面において、「似」の形相の無限遡行という視点が、実に有効に登場しうるのではないか。プラトンが[3]でパルメニデスに、わざわざ「かの形相そのもの (auto to eidos)」と言わせているのも、ここに、先にも見たように、ソクラテスがゼノンに対抗して当初から提出してきた「似」の形相そのものへの言及が暗示されうるからであろう。[2]を受けて[3]は、今や読者には、二重の読みを許す。そして、[3]でこの暗示が有効に成立するためにこそ、[2]の「同じ一つの形相を分有する (henos tou autou eidous metechein)」という表現において、eidousは必要となるし、metecheinは、その本来の、形相の分取の意味をまた必要とすると考えられよう。

ただ、[3]の「かの形相そのもの (auto to eidos)」が「似の形相」を示唆するものであっても、そしてその場合[4]の後半が形式上、「似」の形相の無限遡行を指摘するものとなりうるとしても、依然として、このとき[4]の前半が主張するのは、[1]の「何かが形相に似ているとしたら…」に呼応して、「何かが形相に似るということも、形相が他の何かに似るということも不可能ということになる。」ということであることは動かない。つまり、不可能であると主張されるのは、何かが「似の形相」に似るということではなく、何かが「形相」に似るということなのである。

かくして、パルメニデス発言が[3]の時点で「似」の形相を読者に示唆したとすれば、パルメニデスの議論は、([2][3]より)「互いに似たものは「似」の形相により似る」ということ、しかし、もしこのような「似る」の意味で([1]より)「何かが形相に似る」ということを許すなら、([4]より)——「似」の形相も含めて——形相というものは成立不可能になってしまう、という議論となる。そして、この議論の意味するところに、よく注意しなければならない。つまり、言い換えれば、この議論は、「似」が形相ではありえないということを主張するものではなく、むしろ、「似」の形相における「似」は、形相を範型としてそれに似ると言われるときの「似」とは別の形相的概念でなければならない、ということに注意を喚起する議論となるのである。

結

「似る」という語の両義性に基づいて前提[1]に虚偽が隠されているとすれば、ソクラテスがそのことを見逃すことになったにせよ、範型モデルによる形相の分取は、第二の無限遡行を、厳密には免れているわけである。一方で、第二の無限遡行の指摘を「似」の形相の無限遡行を暗示するものと解する余地があるとしても、前提[1]に虚偽を認める限り、「似」の形相も、やはり無限遡行を免れていることにはなろう。

それにしても、前提[1]が虚偽をはらむにせよ、第二の無限遡行は対話篇中での若きソクラテスを説得してしまう⁽¹⁶⁾。パルメニデスによる無限遡行の指摘にすぐ先立ってソクラテスが提出したのがアイデアの範型モデルであるからには、パルメニデスが対話相手ソクラテスに対して試みている論駁は、範型モデルのアイデアに対するものと考えるのが自然であろう。また、パルメニデスによる第二の無限遡行の指摘は、範型モデルのアイデアに対するものとしてこそ、第一の無限遡行に基づく形相の原理、——多数の事物に認められる同じ一つの容相を、形相として取り出す——いわゆる「多くのものの上に立つ一つのもの」⁽¹⁷⁾の原理には還元できない、形相に関するあらたな想定に対して、批判の矛先を向けたものとなるだろう⁽¹⁸⁾。言うまでもなく、似の形相の無限遡行の方は、複数の似ているものが、似の形相の分取によって互いに似る、という原理から導き出されるものであり、その無限遡行自体は、アイデアの範型モデルの想定に直接には依存しない。似ているものが、似の形相の分取によって似ているものであるというのは、その分取の仕方——例えば、形相を範型としてそれに似る、という仕方——とは関わりなく、形相とそれを分取するものに関する、ゼノンに対し当初からソクラテスが提出している第一前提にすぎない⁽¹⁹⁾。

それでは、「似」の形相の存立不可能の指摘は、対話相手ソクラテスに対する論駁として、果たして必ず必要であろうか。「似」の形相の無限遡行の提示そのものは、確かに、ゼノンの「似ていて似ていない」のパラドクスに対するソクラテスの反論という、『パルメニデス』篇冒頭部の対話の枠組みを理解する読者に対して、その機知を発揮するであろう。しかし、何よりも重要なのは、前節最後で見たように、「似」の無限遡行が暗示されている局面を持つこの議論のポイントが、けっして「似」の形

相がありえないという点にではなくて、むしろ、「似」の形相が、範型アイデアの想定において本来意味されるはずの分取の仕方としての「似る」ということとは異なる形相的概念である、という点にあると考えられることである。わざわざゼノンその人の論説を踏み台としてソクラテスに提示させた「一つ」のものとしての「似」の形相と、そして「似」の形相を分取する多くのもの、という一対多のモチーフが、『パルメニデス』篇冒頭部を通して有効に生きるためにも、「似」の形相は、「一つのもの」という根本的規定を何らかの意味で堅持できる限り、「一つ」のものである形相、すなわちアイデアの、候補である資格を失ってはならないだろう⁽²⁰⁾。

注

- (1) D.Frede [2002] 'Comments on Annas', J.Annas and C.Rowe (eds.), *New Perspectives on Plato, Modern and Ancient*, Cambridge, Massachusetts, pp.25-36, at p.33. 以下では、いわゆるプラトンの中期アイデア論を念頭に置いて「アイデア」という表現も用いるが、『パルメニデス』篇第一部からの訳出や原典に沿った解釈の文脈では、よりニュートラルに「形相」を用いる。
- (2) M.Schofield [1996] 'Likeness and Likenesses in the *Parmenides*', in C.Gill and M.M.McCabe (eds.), *Form and Argument in Late Plato*, Oxford, pp.49-77.
- (3) 注 6、および注 18 を参照。
- (4) 以下では、原文の直接の訳語として訳し分ける以外、分取も分有も互換的に用いる。
- (5) 注 20 参照。
- (6) Cf. *Met.* 990b17, 1039a2-3, 1059b8. アリストテレス自身の構成した「第三の人間」の無限遊行は、アフロディシアスのアレクサンドロスの伝える *Peri ideôn* 断片に残されている (recensio vulgata 84.21-85.3 *Commentaria in Aristotelem Graeca* vol.1)。注 18 参照。
- (7) 132c11 の anoëta を、能動で読む。ただ、受動の意味をかけて言われている可能性を考慮に入れ、両方にとれるよう訳した。
- (8) Cf. G.L.Owen [1965] 'The Place of the *Timaeus* in Plato's Dialogues', in R.E.Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, London, pp.318-319. 同書

掲載の H.F.Cherniss ‘The Relation of the *Timaeus* to Plato’s Later Dialogues’
も、この点については同様の見解に立つ。

- (9) Cf. Schofield, pp.50, 64. Vlastos の提起した Non-Identity assumption に由来する。Cf. G.Vlastos [1954] ‘The Third Man Argument in the *Parmenides*’, *Philosophical Review* 63, pp.319-49, [1969] ‘Plato’s “Third Man” Argument (*Parm.*132A1-B2): Text and Logic’, *Philosophical Quarterly* 19, pp.289-301. 前者における Vlastos 自身の Non-Identity assumption の定式化を含め、Vlastos の議論の再構成は、M.Cohen [1971] ‘The Logic of the Third Man’, *Philosophical Review* 80, pp.448-75 (Fine [1999] *Plato I: Metaphysics and Epistemology*, Oxford に所収。pp.275-297) を参照できる。後者、いわゆる TMA2 は [1973] *Platonic Studies*, Princeton に所収 (pp.342-360) されているが、ここでの Vlastos 自身の Non-Identity assumption の定式化 “If anything has a given character by participating in a Form, it is not identical with the Form” (p.351) は用いない。この定式化は、(i)形相は自らの分有している形相とはまた異ならねばならない、ということの意味する以外に、Vlastos の意に反して、(ii)形相自身が形相を分有することは不可能である (形相を分有するものは、形相ではない)、ということをも含意しうる。
- (10) Cf. Schofield, p.64.
- (11) 古代より、Proclus はパルメニデスのイデア論批判に哲学的産婆術を見ている。Cf. in *Parm.* 906.37-907.22, G.R.Morrow and J.M.Dillon [1987] *Proclus’ Commentary on Plato’s ‘Parmenides’*, Princeton, pp.265-266. Schofield, p.52.
- (12) パルメニデスによるイデア論批判を『パルメニデス』篇の第一部と考えれば、第二部は、パルメニデス自身による「一」の「ある」「あらぬ」の仮定から導かれる「一」と「一以外のもの」に関する帰結からなる。Schofield によれば、第二部における「似」に関わる議論は、「似る」が二階の述語 (second-order predicate) であって、「似」の形相を分有するものではないことを読者に示しているという (pp.70-72)。しかし Schofield のこの見解は、「一」の「ある」からの帰結としての、「一」や「一以外のもの」について否定されることと肯定されることとの、両議論 (否定 139e7-140a5, 159e2-160a3. 肯定 148b1-2, 158e2-159a4) からの引用に基づいており、両議論の意義に関わる解釈上の立場に依存するものであることには留意したい。
- (13) H.Jackson [1882] ‘Plato’s Later Theory of Ideas: II: The *Parmenides*’,

Journal of Philology 11, pp.287-331, at p.291, no.1.

- (14) in *Prm.* 911ff. Cf. R.E. Allen [1997] *Plato's 'Parmenides'*, New Haven and London, p.181, no.28.
- (15) Cf. Schofield, p.63. Schofield の考えでは、続く[3]の「かの形相」を「似の形相」と理解すれば、[2]の「形相 (eidous)」を削除しなくても、[2]と[3]は内容的に重複しないですむ。[2]のほうは、「(互いに似ているものは) 同じ一つの形相の分有によって」似ていると言い、[3]のほうは、それらはすなわち「似の形相の分有によって」似ている、とすることになるからである。
- (16) 範型モデル提出を受けたパルメニデスのこの無限遡行の議論によるソクラテスのあっさりとした陥落は、範型の相の無限増加を避けるために神に一つだけ相を作らせた『国家』十巻のソクラテスの入念さとは、いかにも対照的である。Cf. *Rep.*597c. また *Tim.*31a.
- (17) Cf. 132a2-3 *mia tis isôs dokei idea hê autê einai epi panta idonti* . . .
- (18) アレクサンドロスは、「第三の人間」の無限遡行として、アリストテレスの *Peri ideôn* 由来の構成によるものとともに、Eudemus の *Peri lexeôs* 由来の構成によるもの (recensio vulgata 83.34-84.7 *Commentaria in Aristotelem Graeca* vol.1) を伝えている。アレクサンドロスの考えでは、両者の構成による「第三の人間」の無限遡行は結局共通した議論に帰着するが、その前提に横たわるのは「似たものが似たものであるのは、互いのあいだである同じものが共有されているから (tou autou tinos metousiai) である、と[プラトニストが]考えたゆえである。というのも、人間とその形相は似たものだからである (homoioi gar hoi te anthrôpoi kai hai ideai)」(85.5-7) という理解である。アレクサンドロスの総括から推論できるのは、アリストテレスが「似る」を、「形相を帯びる」という意味ではなく、あくまで「性質を共有し合う」という意味でとりながら、おそらく『パルメニデス』篇第一部の第二の無限遡行を、第一の無限遡行と同型のものとして解釈していたということである。同型とは、すなわち両者の無限遡行を、ある性質を二つのものが共有する (第一の無限遡行の言葉では「同じ容相を持つ」、第二の無限遡行の言葉では「似る」) なら、その性質を離在させた上、別のものとの間で同じ性質をあらたに共有させ、共有されたそのあらたな性質をまた離在させる、というプロセスに依存させるわけである。
- (19) Cf. 129a-b.
- (20) ソクラテスの形相分取の説を吟味するに先立って、形相の想定をその種類に

応じてパルメニデスに問わせた上で、プラトンは「似」や「一」や「多」については、ソクラテスに迷いなく、形相としてのこれらの想定を肯定させている。『パルメニデス』第一部と第二部との、双方の議論の主題的な継続性に鑑みて、むしろ当然の措置だろう。注 12 参照。